

日本・スコットランド文化交流史

— 明治のジャポニズムと英国グラスゴウ

I はじめに

一九世紀後半のヨーロッパ文化・芸術界では、一八六〇年代後半に二世紀以上の鎖国政策から脱し明治維新を遂行して西欧世界との接触を開始・拡大した日本に大きな関心を集めた。そして日本の伝統文化が異文化のヨーロッパに大きな影響を与え、ジャポニズムとして受け入れられヨーロッパ社会にアール・ヌーボー（新時代）と呼ばれる時代を現出したことは知られている。つまり北斎や歌麿の絵画をはじめ、日本の絵画・織物・美術工芸・建築がゴッホ、ルイ・マジョレ、エミール・ガレ等をはじめ多くのヨーロッパ芸術家に影響を与え、また多くの美術・芸術専門家がジャポニズムを論じた。⁽¹⁾

それでは、このアール・ヌーボー時代を作り上げた歴史的背景は

どのように形成されたのであろうか。またどのような関連から、この時代は出現したのであろうかについては未だ十分に研究されていないと言えよう。

私は、スコットランドと日本の技術交流史を研究する過程⁽²⁾で、実はヨーロッパ社会に日本の伝統美術・芸術を紹介したのはスコットランド人技師達であり、またグラスゴウには日本にはあまり知られていないジャポニズムの画家達がいたことに気づいた。そこでスコットランド人技師達がヨーロッパのジャポニズム時代の幕を開いたとの立場から、その歴史的淵源からの論証を試みたい。

II スコットランドと日本

イギリスがヴィクトリア期の最盛期を迎え「世界の工場」と讃えられた時代、グラスゴウを中心とするクライド河流域の西部スコッ

北 政 巳

トランド地域は「大英帝国の工場」と呼ばれ、鉄工・鉄道・造船業で栄えた⁽³⁾。またスコットランド人は早くから海外への移住・出稼ぎに積極的であったが⁽⁴⁾、一八三三年に東インド会社の経営独占が廃止されるとインド以東のアジア、特に中国へスコットランド人は進出した。そこにはスコットランド人の外交官・技術者・商工業者のネットワークがあり、そのルートから日本へのスコットランド人の到着と、また日本人の英国をはじめ世界への渡航ルートが実現した⁽⁵⁾。

そして幕末・明治の日本で活躍した著名なスコットランド人達、「第一号のお雇い外国人」ブランドン (R. H. Brunton)、「長崎の外商グラババー (T. B. Glover)」、「工部大学校 (東京大学の前身) の初代校長ダイアー (H. Dyer)」、「日本造船・海運業の最大の功労者ブラウン (A. R. Brown)」等が登場した⁽⁶⁾。彼らを通して、西欧社会から観れば異質ながら独自の文化と発展を遂げた極東の小国・ニッポンが、イギリス・ヨーロッパ諸国に伝達された⁽⁷⁾。また彼らの助力により、明治維新後に近代化・工業化を急ぐ日本が「東洋のイギリス」になる夢を実現させる。事実、明治維新後僅か三〇年にして、アジアの強国となり日清戦争の勝利を導き、一九〇二年には日英同盟を結びイギリスのパートナーとなり、さらに日露戦争の勝利を導く事になる。この歴史的背景に、スコットランドとフランス・イタリアとの関係が付加される。つまり一七〇七年にイングランドに経済的合併を強いられた「連合王国」を形成したスコットランドは⁽⁸⁾、元来イング

ランドとの歴史的な対抗関係から、逆に大陸のフランスとは中世以来、親密な関係が存続してきた。事実、スコットランド人の有識者層にはスコットランドの大学を卒業後に、大陸文化の教養を積む「グランド・ツアー」(Grand tour) が伝統であった⁽⁹⁾。そのスコットランドが合併を経てイングランドの影響下に産業革命を開始し、そして一九世紀中葉・後半にはイギリス全体の重工業を主導する立場となる。その頃ちょうどイタリアでガリバルディが独立運動を起すすと、裕福なグラスゴウ市民層は支援活動を展開し、革命を成功に導いた⁽¹⁰⁾。

一八六〇・七〇年代、グラスゴウがイギリス第二の都市 (ヨーロッパ第六の都市) として「鉄道の都」、「機械の都」、「造船の都」と讃えられ、世界の鉄道生産の五割、造船生産の四割を占める程に栄えた時代に、グラスゴウや「文芸の都」のエディンバラはその富を生かす建築ブームを迎えた⁽¹¹⁾。フランス・イタリア等のヨーロッパ大陸から多くの建築家・美術工芸家が到来し活躍した。特に近代家具・調度品の製作は、鉄道や造船業ビジネスと関連して興隆したものである⁽¹²⁾。

III グラスゴウ大学と日本

グラスゴウでの二つの産業博覧会の前に、日本とスコットランド交流の前史が存在した。先ず最初に一八六〇年代の幕末時代以来、

グラバー、ブラントンやブラウン等を介して、スコットランド造船・海運業者の側に日本への関心が存在した。⁽¹³⁾次に一八七二年の岩倉使節団のイギリス・グラスゴウ訪問を通じてのダイアーをはじめとするグラスゴウ大学中心に編成された工部大学の教師団やエディンバラのステイブンスン社派遣の燈台技師達の来日があり、次に逆の流れとして日本からの文部省派遣の邦人留学生や工部大学校の優等生のグラスゴウ大学留学派遣を通じて、⁽¹⁶⁾グラスゴウやエディンバラ社会には、かなり日本文化も浸透していった。例えば英語では漆器商は「日本を縁としてジャパナー (Japaner)」と呼ばれたが、一八六六年のグラスゴウ市郵便録には一〇を超える同職業表記が見られる。⁽¹⁷⁾

また一八七四年に日本で初の西欧式技術カレッジとなる工部大学校の校長として赴任するダイアーには、日本に西欧近代技術を移植する目的と同時に西欧美術を日本に紹介する意図もあり、イタリア人 E・F・フェノロサを登用したり、結果的には挫折するが、工部大学校に付属美術学校を作る計画に着手した。⁽¹⁸⁾一八七〇年代以降の日本人青年のグラスゴウ大学への留学の歴史については、グラスゴウ大学特別資料室とストラスクライド大学図書館所蔵の『登録証』(matriculation)を調べると、第一次世界大戦まで約八〇名の邦人学生や教師がグラスゴウ大学やアンダーソン・カレッジ(後年にグラスゴウ・スコットランド西部技術カレッジ、またグラスゴウ王立技術

カレッジをへて現在のストラスクライド大学、Strathclyde Univ.)に留学した。⁽¹⁹⁾

IV スコットランドの芸術家と日本

一九世紀後半のグラスゴウは鉄道・機械・造船・海運業で栄え、英国のヴィクトリア盛期を象徴する豊かな都市となり、同時に壮麗な最新建築とともに美術工芸においてもヨーロッパをリードする時代を迎えた。⁽²⁰⁾ヨーロッパ中世では北ヨーロッパではブルーシュ(Bruges)が栄え、油絵が流行しヴァン・アイク (Van Eyck) 兄弟が登場した。ついでオランダからライン河流域の通商の繁栄を背景に、北ヨーロッパにゴシック (Gothic) 建築が栄え、ついで南ヨーロッパのイタリアのベニス (Venice) が芸術的に再び栄える時代を迎え、同時期にヨーロッパ文化を主導するスペインのマドリッドやオランダのアムステルダム等との交流を深めた。⁽²¹⁾

そして一九世紀の後半にはグラスゴウ通商の世界的繁盛の中で、新しい美術感覚をもつ固有の芸術家集団が誕生し「グラスゴウ・ボーイズ」(Glasgow Boys) と呼ばれた。⁽²²⁾彼らグラスゴウ出身の若き芸術家達は、ヨーロッパ諸国での先輩画家を研究し、また「新イギリスの画家協会とも連係をとり、彼らは郷土愛から風景画に力を入れた。その頃伝統的な芸術の都とされたパリやミュンヘンでは、従来

の人物画や静物画の是非をめぐっての論争が展開された。グラスゴウではさほど画法や様式をめぐる論争はなかったが、従来のグラスゴウとエディンバラ両都市間のライバル意識を背景とするイニシアティブ争いが存在したが、次第にグラスゴウが美術工芸の斬新性を発揮し、王立グラスゴウ美術協会 (Royal Glasgow Institute of the Fine Arts) が中心となりまとまってゆく。例えばグラスゴウの資産家がヨーロッパ流行の画家の絵を各地で購入して持ち帰り、ロンドンの芸術家よりも遙か以前に、グラスゴウの美術・芸術家に、それらを見る機会を提供した。また一八八六年にエディンバラで国際博覧会が開かれたが、そこにはオランダやフランスの最新画が集められ、スコットランドの芸術・美術家にとって、ヨーロッパの先進文化を吸収する機会となった。そしてグラスゴウ・ボーイズの主導でエディンバラをはじめスコットランド各地での芸術・美術ブームが作られていった。⁽²³⁾

興味深いのは、当時マンチェスターの画家達が所謂英国画と呼ばれる風景絵画に熱中し、エディンバラ画家達はフランスやオランダ画法の追従を追求したのに対し、グラスゴウ画家達は全てに関心を持って自由な問題意識で絵画に専念した。また美術・工芸の伝播の機会として、当時、盛んに開催された産業博覧会の役割が注目される。⁽²⁴⁾ 何故なら新しい機械の製造と販売が、資本主義市場での工業デザインや機能的装飾の進展を必然化し、さらに相乗的にそれが芸

術・美術との交流を促進したからである。

そこで次に一八八八年と一九〇一年のグラスゴウ国際博覧会における「日本」の立場と評価と、スコットランドと日本の文化交流史の立場から、当時のスコットランドを代表する建築家マッキントッシュ (Charles Rennie Mackintosh) とグラスゴウ・ボーイズの中で有名な二人の画家、ホーネル (Edwin A. Hornel) とヘンリー (George T. Henry)、またスコットランドからアメリカへ移民したウィッスラー (James A. Whistler) の四人を取り上げてみたい。⁽²⁵⁾

V 一八八八年のグラスゴウ国際博覧会と日本

イギリスにおける大規模な国際的な博覧会は、一八五一年のロンドンの水晶宮 (Crystal Palace) における博覧会にはじまる。この博覧会はイギリスのヴィクトリア時代の繁栄と発展を象徴する展示会であり、六〇〇万人を超える入場者を集め、国民への教育的役割も大きかった。⁽²⁶⁾

グラスゴウでの一八八八年の国際博覧会は、一八六二年のロンドン博覧会に次ぐ大規模な展示として企画された。グラスゴウは、一八一年以来、人口では英国第二の都市と呼ばれたが、ヴィクトリア盛期のビジネスの繁栄により当時七六万人を超え、ヨーロッパでも六番目の人口をもつ都市となっていた。⁽²⁷⁾ 特に一八七八年の経済不況から回復し、グラスゴウは世界のハイテク先進都市として鉄道・

造船・機械製造の重工業ビジネスで成功した。その興隆を象徴したのが、一八七二年に建築された壮麗なゴシック建築のグラスゴウ大学であり、また一八八三年に工事が開始され一八八八年にヴィクトリア女王が出席して開所式が開かれたグラスゴウ市議会建築や、一八九〇年の当時の世界最大のフォース橋建設であった。⁽²⁸⁾

一八八八年五月八日にウェールズ皇太子夫妻が、グラスゴウ大学横のケルヴィン河に臨む「東宮」(Eastern Palace)の中心パビリオンを訪問し、金鍵でドアを開ける式典が行われた。建物はグラスゴウの著名な建築家セラーズ (James Sellars) の設計によるが、彼は「東洋風」の様式ときめ「博覧会開催目的に適合させると同時に、自然調和を考えて木の感覚」を取り入れて実行したとされる。⁽²⁹⁾ 各パビリオンは、芸術、産業、農業、科学と分けられたが、四つの各館の装飾を「グラスゴウ・ボーイズ」のガスリィ (James Guthrie)、ヘンリー (G. T. Henry)、ウォルトン (Edward Walton)、ラヴェリィ (John Lavery) が競演し担当した。

この国際博覧会には多くの世界的に著名なグラスゴウの産業資本家・金満家からの協力があり、例えばセント・ロレックス化学工場、テナント卿 (Sir Charles Tennant)、蒸気機関製造のニールスン社 (Nelson) のレイズ (James Reid) からの出品協力があつた。⁽³⁰⁾ また「グラスゴウ・ボーイズの英雄」と呼ばれたウィッスラーの最高傑作『トーマス・カーライルの肖像』絵もリバプール市から賛助協力

で出品された。さらに一八五一年のロンドン国際博覧会では出品物の価格表は禁止されたが、この一八八八年のグラスゴウ博覧会では即売は禁止されたが、情報として価格表が展示され、大いにグラスゴウ産業製造品の世界輸出に貢献した。ヨーロッパをはじめ南北アメリカやアジア諸国からの来訪者が博覧会場を訪れ、展示された工業商品・建築・芸術作品等を注文した。当時の資料によると、特に人気が高かったのはバラフィン・ヤング電燈・鉱物会社 (Paraffin Young's Light & Mineral Co.) やタルシス硫黄・銅会社 (Tharsis Sulphur & Copper Co.)、ユーブランド・ライル織物会社 (Copeland & Lyle Textile Co.)、ベイズリィのクラークス (Clarks) 社の織物会社の作品であった。

多くの来訪者の注目を集めたのは、グラスゴウの誇る造船業と関連ビジネスであった。例えばネイピア造船所のカーク (A. C. Kirk) 博士発明の三連鎖エンジンやデニィ兄弟社の実用化の四連鎖エンジンが賞賛をあびた。またマクファーレン (Walter Macfarlane) 社のサラセン鑄造所 (Saracen Foundry) で作られた華麗な鉄製品、またデニィ兄弟社はウォルター・ブロックの特許デザインを用いて美的にも最高の船舶備品を制作し、美麗な日本刺繍で装飾した食堂や女性特別室の模様を展示し有名となった。⁽³¹⁾ また一八七一年創立のロンドン・ダイヤモンド研磨会社の作品も衆目を集めた。また海外からの出展では、勿論アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアから

の各種輸入品、ベネチアやボヘミアからのガラス製品、オランダやドイツのビール、オーストラリアのワイン酒等に人気が集まったが、東洋を代表したドウルトン (Doulton) のインド館に多くの観光客が集まり、金銀細工の装飾品技術の実演や高級手作り織物に訪問者の関心が集まった。インドとグラスゴウ間にも歴史的に深い関係が存在して好評であったが、むしろインド国内のカルカタ、マドラス、ボンベイ等の地域間対抗意識から無用なトラブルが多かったが、歴史的関連の強さは一八八六年のロンドン植民地インド展覧会 (London Colonial & Indian Exhibition) でインドを代表したムハルシ (Mukharji) がグラスゴウ博覧会を訪問、多くの物品を購入したが、その運搬費用が、グラスゴウ市と二つのグラスゴウの航海会社、アンカー航海社 (Anchor Line) と克蘭航海社 (Cian Line) で負担されたことにも見受けられる。⁽³²⁾

VI 一九〇一年のグラスゴウ国際博覧会と日本

一九〇一年のグラスゴウ国際博覧会は、一八五一年の英国水晶宮国際博覧会の五〇周年記念を名目に、さらにグラスゴウでの一八八八年博覧会の成果をふまえ、グラスゴウ技術の世界最高水準を謳歌するかたちで開かれ「グラスゴウ・ボーイズ」達のデザイン・美術能力を最大に発揮する機会となった。この博覧会は「機械の都」と讃えられるに至ったグラスゴウにおいて、しかもグラスゴウ大学の

創立四五〇年祭に合わせて開催され、世界数十カ国からの出展をみた。建築された特別記念会場は、グラスゴウ大学が生んだ最大の科学者を記念してケルヴィン博物館・公園・記念会堂と命名された。⁽³³⁾そしてギルモア丘に聳え立つスコット (G. Scott) 設計のゴシック建築の壮麗なグラスゴウ大学と、ミラー (J. Miller) 設計のスペイン・ルネッサンス風の美術館、さらにオリエンタル (東洋風) の産業館の三大建築は、東西の建築様式と新時代の二〇世紀を象徴すると賞賛された。

注目されるのは、この国際博覧会に日本はインド館の二倍の広さをもつ展示館を作り、日本伝統の衣類、木工・象牙彫刻、金属細工、絹織物、絨緞、和裁、小間物、家具等を出品した他、茶道、華道、入れ墨の実演も行った。また同博覧会に協賛したグラスゴウ・西部スコットランド諸工業のガイド・ブックが発行されたが、編集者は日本帰りのグラスゴウ・西部技術カレッジの理事となったダイアーであった。ダイアー報告には、グラスゴウ周辺の鉄・黄銅鑄造、ボイラー製造、造船・海事機関機械、水管付きボイラー・器械、電気・工作機械、電灯事業、一般機械、精糖器械、蒸気機関車、鉄橋梁・屋根、鉄道諸器械、繊維機械、裁縫マシン、水利工事、衛生・暖房器械等のビジネスについて体系的に分類され、各社の規模・製造能力・販売市場と会社史が詳しく紹介された。⁽³⁴⁾

この博覧会のもうひとつの大きな特徴は、スコットランド出身で

新天地アメリカでビジネスに成功した企業家、蒸気機関車のニールソン (Neilson) 裁縫器械のシンガー (Singer)、ゴムタイヤのダンロップ (Dunlop)、鉄製造業のカーネギー (Carnegie) 等が「故郷に錦を飾る」かたちで出品していた点であった⁽³⁵⁾。

膨大な資料から当時の日本とのビジネス関係に限定して調べると、先ず蒸気機関車や鉄製品輸出はマクファールン (Walter Macfarlane) 社やヒューストン (J. & G. Houston) 社が顕著で、特に前者は幕末時代から多くの鉄製の鑄造製品を長崎・神戸・横浜に輸出していた。

またグラスゴウ周辺での日本との取引諸企業を調べると、造船・海運業に関連するボイラーや諸器具はネイピア (Napier) 造船所の他、ベニー (J. Bennie)、ハステイ (J. Hastie)、シャンクス (T. Shanks) 社等が、電気機械製品はケルヴィン・ホワイト (Kelvin & White) 社、ミーシャン (Mechan) 社、メイヴァ (Mavor) 社、クルルスン (Coulson) 社等が、一般機械工業製品は蒸気機関ビジネスに関連してマードック・エイトキン (Mardock & Aitken) 社、ニールスン (Neilson) 社とダブス (Dubs) 社が合併したノース・ブリティッシュ (North British) 蒸気機関車社が、精糖器械製造はマコーニー (P. & W. McOnie) が、鑄造パイプと水利機械器具はエディングトン (T. Edington) 社、レイドロウ (R. Laidlaw) 社、マクファレン・ストラング (Macfarlane & Strang) 社

やグレンフィールド・ケネディ (Glenfield & Kennedy) 社が、衛生・照明・暖房器械はバーストラウズ (Barr & Straud) 社、マクニイス (T. S. M'Innes) 社が、鉄橋梁・屋根はアロル (Arrol) 社が挙げられる⁽³⁷⁾。

興味深いのは、同年九月一日に国際産業博覧会に合わせてグラスゴウ大学でケルヴィン卿を中心に英国科学促進会議 (British Association of Promoting Science) が開催され、日本を代表して参加した帝国大学化学教授の桜井錠二と同数学教授の菊池大麓が名誉学位を受けたことである。これは幕末以来の日本人青年学者とケルヴィン卿を核とするスコットランド人科学者との交流の反映であったと言えよう⁽³⁸⁾。また交流史のエピソードとして、一九〇一年の四月と一〇月には、グラスゴウ大学入学試験監督として、ちょうどロンドンへ留学中の帝国大学英文学教授であった夏目金之助が招かれ「日本人受験者に日本語試験を担当した」記録が大学評議会記録に残されている⁽³⁹⁾。

また幕末期に P & O (Peninsular & Orient Navigation) 社の船長として来日し、一八六九 (明治二) 年に燈台局に入り、日本各地の燈台を建設したスコットランド人技師ブランドンのための船舶手配特に「明治丸」のグラスゴウから日本への曳航から三菱蒸気船会社の創立、さらに共同汽船との合併による日本郵船の創立、さらに一八八九 (明治二二) 年にイギリスに戻りグラスゴウで日本名誉領事

となったA・R・ブラウンの活躍も大きかった。⁽⁴⁰⁾つまりブラウンは日本の造船・海運業が草創の時代にはグラスゴウでの船舶買い付け、成長期にはグラスゴウ海事技師の日本への招聘や邦人技師のグラスゴウ造船所での実習斡旋を行った。さらにわが国の造船業が自立化の時代を迎えると、グラスゴウに戻り、そこから最新海事諸器械の日本への販売を手がけたのである。

このような人的交流を通じて、多くの日本政府・海軍・造船海運業関係者がグラスゴウを訪問した。⁽⁴¹⁾このような歴史的状况から、一九〇二年の日英同盟締結への動きが始まり、幕末以来の日本の指導者の願望であった「東洋のイギリス」誕生の歴史的背景が形成されたのである。⁽⁴²⁾

VII 日本とスコットランドの文化交流

明治期の日本における西洋美術と日本美術の交流に大きな役割を果たした人物に、一八七八(明治一一)年来日のイタリア系アメリカ人フェノロサ(F. E. Fenollosa)が挙げられるが、彼はダイアーが工部大学校に付属美術館の設置を決めた時に、採用された。その背景には、前掲の一八六〇年代のイタリアとグラスゴウ市の密接な関係が窺われる。またアメリカのボストン美術館に多大な貢献をしたガードナー(C. Gardner)もグラスゴウ出身で新天地で鉄鋼業で成功したスコットランド人移民であった。⁽⁴³⁾

日本との芸術交流の先駆者には、グラスゴウ美術学校(Glasgow Art School)出身のイースト(A. East)が挙げられるが、彼は日本を訪問して帰国後、美しい京都の風景を絵画シリーズで紹介、多くのスコットランド人に大きな影響を与えた。⁽⁴⁴⁾そこで明治のジャポニズムと関係の深い四人のスコットランド人画家・芸術家を取り上げてみたい。

1 マッキントッシュ(Charles Rennie Mackintosh)

マッキントッシュは、日本でも最も著名で愛好されるイギリス人建築・美術家であろう。一八六八年六月にペイズリー(Paisley)出身の警官とエア(Air)出身の母との間に四番目の子供として生まれた。彼は一六歳の時にグラスゴウの建築家ハッチソン(J. Hutchison)の徒弟奉公に入り、また自立を決意して父姓のマッキントッシュ(McIntosh)から苗字の綴りを変えた。また彼の祖父は繊維染色業から出発し、船舶用の防水布や防水雨合羽の発明で有名なマッキントッシュ(C. McIntosh)であった。⁽⁴⁵⁾マッキントッシュは、徒弟奉公のかたわらグラスゴウ美術学校に学び、妻となるマーガレット・マクドナルド(Margaret Macdonald)と出会い結婚した。当時ヨーロッパで流行しつつあったアール・ヌーボーの芸術文化が、機械の都として富裕化したグラスゴウに定着する。新しく建築される街並みや華麗な建造物から家具・調度品に至るまでヨーロッパから

流入する。またそれが鑄造される諸機械・器具にも反映され、芸術・機能的に洗練された製品完成に向かうことになる。その時に、ヨーロッパ伝統の優美な芸術主義とスコットランド固有の直線的・簡素な様式との合体が考えられ、異文化の日本のの様式も取り入れられて、最新式にして懐古的なマッキントッシュの芸術・建築を生んだのである。⁽⁴⁶⁾そこにはスコットランド出身で、日本の工芸美術の研究で著名であったドレッサー⁽⁴⁷⁾(Christopher Dresser)や訪日経験のある多くのスコットランド人技師・商人の貢献も大きかった。

グラスゴウには一八六七年からグラスゴウ芸術クラブ(Glasgow Art Club)が設立されたが、絵画・彫刻中心の伝統的な純粹芸術に限定され、また芸術面での学術主義を掲げるエディンバラの王立アカデミー(Royal Scottish Academy)の傘下にあった。そしてエディンバラ芸術家の保守主義への反発から、グラスゴウの富裕な市民社会に支えられグラスゴウ・ボーイズが結成された。マッキントッシュは、一八八二年に結成されたこの運動に同調した女性活動家克蘭ストン(Stuart Cranston)嬢の率いるグラスゴウ社会女性芸術クラブ(Glasgow Society of Ladies Artists Club)とも親交を保ち、⁽⁴⁸⁾グラスゴウ芸術運動をリードした。

一八八五年に、未だ無名であったマッキントッシュにグラスゴウ美術学校新校舎設計が依頼された。彼には日本訪問経験はなかったが多くの友人の影響を受け、同美術館の各所に和風建築・美術の様

式を取り入れた。先ず大学校舎正面の鉄製柱に和風の花模様や家紋様式、さらに格子縞模様を入れた他、美術館・図書館やアトリエ部屋の天蓋にも表現された。⁽⁴⁹⁾

このヴィクトリア時代の近代的なモダン都市グラスゴウの繁栄を象徴したのが「紅茶文化」であった。この紅茶愛飲の習慣は、一八七五年に克蘭ストン嬢が自らのティー(紅茶)・ショップ前で通行客にサーヴィスで振る舞ったことから始まったが、一八八八年のグラスゴウ万国博でオランダのココア・ハウス「ヴァン・ホーテン」の人気を見た彼女は早速「紅茶ハウス」建設を企画した。そこで克蘭ストン嬢は二二歳の青年ジョージ・ウォルトン(George Walton)に設計を依頼した。彼の兄エドワードはグラスゴウ・ボーイズの中心人物の一人で万博会場のドーム壁画制作に参加し、三人の姉妹も工芸家として活躍していた。⁽⁵⁰⁾ジョージ・ウォルトンは昼は銀行で働き、夜はグラスゴウ美術学校でデザイナーの修業をしていたが、未だ作品は無名に近かった。克蘭ストン嬢とグラスゴウ社会女性芸術クラブでつき合いのあった彼の姉を介して話を受けた。

先ず一八六七年建造のアーガイル(Argyll)街の「紅茶ルーム」の改築をウォルトンに依頼した。彼が設計したステンシル(壁画に有孔原画を重ね絵の具を刷り込む)の野ばら壁面装飾は大好評をとり街全体のシンボルとして賞賛された。しかしウォルトンを真に有名にしたのは、一八九六年にウォルトンがその昔のタバコ貴族の名前

を冠したブキャナン (Buchanan) 街に「紅茶ルーム」を設計した時である。何故なら施主クランストン嬢の依頼で新進気鋭の建築家マッキントッシュとの共同制作の形をとったからである。クランストン嬢は一九〇〇年にマッキントッシュの妻となるマクドナルド嬢とも懇意であり、彼女の才能が結婚を通じてさらに開花することを期待していた。⁽⁵¹⁾

クランストン嬢の「紅茶ルーム」事業は、アーガイル街店に始まり、ブキャナン、イングラム、ソウキホール各街店へと伸展した。興味深いのは、「ソウキホール」はスコットランド古語で「緑の柳並木」を意味するとされるが、一九〇三年創設のソウキホール街に作られた「ウィロウ(柳)・ティー・ルーム」(willow tea room)は日本の茶文化をも取り入れたエキゾチックな喫茶店として名声を博し、紫色と銀色を基調とした新色彩感覚はグラスゴウ発の新流行として世界に発信された。それは同時に、建築家マッキントッシュの名声をさらに高めた。

マッキントッシュはスコットランド人哲学者ラスキン (J. Ruskin) の『ヴェニス』に、著名な美術装飾家モリス (William Morris) と同じく大きな感化・影響を受け、華麗な装飾のみを追求するのではなく建築構造自体と装飾の有機的な結合を目指し、装飾芸術と機能主義が相反さないことを主張した。⁽⁵²⁾

2 ホーネル (Edwin Atkinson Hornel)

ホーネルは、一八六四年にスコットランド南部のカークブリー (Kirkcubright) からオーストラリアのバックラス・マルシュ (Backus Marsh) へ出稼ぎ中の技師の息子として生まれ、まもなく親の故郷カークブリーに戻った。彼は農業を志し再びオーストラリアへ戻る気持ちであったが父親の死去により断念し、また美術が好きであったことから一八八〇年にスコットランドの文芸の都エディンバラの芸術アカデミーで絵画を学び始めた。エディンバラで三年間の修業後ヨーロッパ大陸に渡り、アントワープで著名な美術教授のベラット (Charles Verlat) のアトリエで二年間、大陸伝統の絵画法の修業をして帰国、故郷を中心にスコットランドの美しい風景画を書き、名声を高めていった。

ホーネルは、カークブリーを訪問したスコットランドの風景画を専門として著名なグラスゴウ・ボーイズのジョージ・ヘンリーと出会った。二人は意気投合して共作も試み、著名な絵画として一八八九年の『ユルイック』(The Dryits) や『東天の星』(The Star in the East) がある。

一八九〇―一八九一年、グラスゴウ協会の展覧会があり、ホーネルにとっては絵画を発表する好機会であった。彼は『蝶々野生のヒヤシンスの間に』(Butterflies, Among the Wild Hyacinths)、『小川』(The Brook) を発表した。作品には多彩な伝統的の衣服を着て遊ぶ

子供達が描かれた。翌一八九二年に彼はより野心的な作品、青空と田舎の風景を背景に一人の少女が蝶々を追いかける一人の少女が牛を面倒見ながら友達を見守っている『夏』(Summer)を発表した。その絵は展示会の後ウォーカー美術館(Walker Art Gallery)で展示され、リバプールのラズボーン(Philip Rathbone)氏の勧めで買い取られ、リバプールの市美術館の所蔵となった。⁽⁵³⁾

一八九二年にホーネルは数多くの興味深い絵を描いたが、主題の多くは小川や垣根近くで遊ぶ生き生きとした子供達を選ばれ、彼独自の多彩な色彩とデザインが賞賛された。その年に発表された三作品のうち二作品『遊戯する子供達』(Children at Play)と『風景』(Landscape)は、一八九三年のグラスゴウ協会展で紹介された。同年にホーネルが描いた『女羊使い』(Shepherdess)と『ヒヤシンスの花の中で』(Among the Hyacinths)はウォーカー画廊に飾られた。一八九三年に日本との関係が深かった『アート・レビュー』(Art Review)のメイヴァ(J. Mavor)編集長の勧めで友人のヘンリーと共に日本を訪問した。そしてホーネルは帰国後に『魚の池』(The Fish Pool)、『日本の庭園』(The Garden)を発表した。これらは現在、大学横のケルヴィン美術館に展示されている。⁽⁵⁴⁾

一八九五年にホーネルは色彩の調和を強調した小さなキャンバス画『森の中の子供達』(Children in a Wood)をグラスゴウ協会です発表、翌一八九六年には同展覧会で『堤横に』(By the Burnside)

と『銀とサンザシ』(Silver and Hawthorn)を発表し、風変わりなデザインながら人間と自然の調和感を豊かな色彩で描き名声を博した。一八九六年にホーネルはアメリカのセント・ルイス博覧会用に日本画を描き、また一八九七年にグラスゴウ協会展覧会に『シーソー遊び』(The See-Saw)を発表した。

興味深いのは、一緒に日本へ行ったが帰国後に日本嫌いとなったヘンリーとの交友物語である。両人の合作『ドルイッド・ヤドリギを運ぶ』は彼らが東洋の叡智に憧れた時代を象徴し、グラスゴウ市議会画廊に飾られている。グラスゴウ大学のハンテリアン美術館には、一九七九年に同大学マカフィー名誉教授から寄贈された『小川』がある。またグラスゴウ商工会議所にも彼の油絵『四人の女性が果樹園で桃をもぐシーン』は、日本画の影響を受けたアール・ヌーボー時代のジャポニズムの傑作として、また知識の木の下のイブ像を思わせ好評を博した。また彼はマッキントッシュに大きな影響を与えた人物とされる。

ホーネルは一九三三年に独身のまま逝去するまで一族の故郷カーブリーで過ごし、日本鼻肩のホーネルは自宅に日本美術館や日本庭園を作り一般に公開する程、日本文化を愛好した。⁽⁵⁵⁾

3 ヘンリー (George T. Henry)

一八五八年にエアシマのアーバイン(Irvine)の醸造業者の息子

に生まれた。彼は一八八一年頃に白と黒のみのデッサン画を試みたが、面白半分で絵の具を使い始めた。何故なら当初、彼の仕事はエンジニア助手として木材の上に図を描くことであり、時として製造品のデザインを描くことであった。ヘンリーは機械仕事で働きながら一八八二—一八八三年の間グラスゴウ美術学校で絵画法を学び、ガスリイ、クロウホール (J. Crawhall)、ウォルトン等のグラスゴウ・ボーイズと知己になり溜り場マクレガー画塾で絵を描き、スコットランド高地の風景『ブリッグ・オ・ツルク』(Brigg o' Ture) を処女作として発表、注目を集めた。続いて二作品『森の中の黄昏』(Gloaming in the Wood)、『一月のブリッグ・オ・ツルク』(A November Days, Brigg o' Ture) を発表し、スコットランドの地形・人物と動物を描き好評を博した。さらに『聖なる湖の先頭』(Head of Holy Loch) を公表した。一八八三年にはスコットランド高地の風景画『アイマウス村の街路』(Street in Eyemouth)、『アイマウス村』(Eyemouth)、『農園の回り』(Around the Farm) を発表した。一八八四年の『遊び友達』(Playmates) を別にして、次第に彼の絵画に風景画よりも装飾的な色彩観が強くなり、一八八五年の『正午』(Noon)、『日没』(Sundown)、『泉と女性』(Woman at Well)、『柳』(Willows) では色彩や線が強調され、感情が強く挿入・表現された絵となった。一八八六年に田舎に戻り、人物と鷺鳥を描いた『オウツリイ、垣根を切る人』一〇月』(Audrey, A Hedge-Cutter,

October) をグラスゴウ協会展で発表した。翌年には『台所用の庭、牧歌的』(A Kitchen Garden, Pastoral) と小さな絵『日没』(Sundown) や『茸庭師』(The Mushroom-Gardener) を発表・展示した。⁽⁹⁶⁾一八八八年には『黄昏』(Gloaming)、『牧歌的』(Pastoral) の他に、『アラン河の土手』(The Banks of Allan Waters) を発表した。特に後者は「王立水彩画協会」展示会で絶賛を浴びた。

また友人のホーネルとの合作で日本絵画・東洋世界に憧れ勉強する一方、一八八九年には兩人の合作で最大のキャンバス画『ギャロウェイ風景画』(A Galloway Landscape) を描き、一八九〇年に他の二作品、彼の童話から想像しての『シンデレラ』(Cinderella)、『豊かな色彩を使った』秋』(Autumn) と一緒に発表した。⁽⁹⁷⁾さらに兩人は一八九〇年に巨大な合作『東方の星』を発表した。この年にヘンリーは、『ジェニ』(Jenny)、『吹かれる蒲公英』(Blowing Dandelions)、『春の季節』(Springtime)、『翌年には『芥子の花』(Poppies)、『麦藁帽子』(The Straw Hat) と二つの風景画『牧歌的光景』(Pastoral)、『エアミア地形』(Ayrshire Landscape) を発表した。また一八九二年に王立スコットランド・アカデミーで展示された『ジプシー』(A Gipsy) と『森の中を歩く』(Thro' the Woods) を発表した。一八九三年のグラスゴウ協会展には、等身大サイズの若きシビック (Dic) 嬢を繊細な筆致で描いた『お嬢さん』(Mademoiselle) を出品した。彼は自らの画法を求めてチュルシー

(Chelsea) 芸術クラブを創始した。

しかし一八九二年後半にヘンリーは病気になり一八九三年二月まで休業したが、その時に日本訪問の話があり、ホーネルと一緒に八カ月間滞日、日本美術・文化を学んだ。日本での生活は詳しくは記録されていないが、ヘンリーは特に男達の祭り・茶会・芸者達の文化等に興味を持ったとされる⁽⁵⁸⁾。二人して来日し各地を訪問し日本の絵画・文化と接したが、ヘンリーはデザイン以外にも、油・水彩・パステル絵の具を用いて、さらに美しく洗練された微妙な色合いを出してゆくことを日本から学んだ。

帰英後の一八九四年の水彩画協会展に出品された『日本の鈴』(A Japanese Belle)と一八九六年のセント・ルイス展覧会に出品された『茶色の着物』(The Brown Kimono)が日本で得た経験を強く表現していた。その他に『果樹商』(The Fruiterer, エアシアのウィア伯所蔵)、『芸者達』(Geisha Girls, エディンバラのゴウドウ氏所蔵)、『日本の壺売り』(A Japanese Pottery Seller, グラスゴウ大学マカフィ教授所蔵)等は、日本芸術の影響を受けた傑作と評された。

しかしヘンリーは、彼が夢想したほどの成果はなく失望して帰国したと言われ、それは同時に日本最良のホーネルとの友情の破綻となった。帰国後の彼の作品として『羽の襟巻』(The Feather Boa)、『若い女性、果樹商の肖像画』(Portrait of a Young Lady; Fruiterer)、『若い女性の窓際にもたれた姿を描いた『ネル』(Nell)、『

子供達の遊ぶ『白蓮』(Lilac)、『森の中で赤い野苺を集める『ロウアンズ』(Rowans)』等を発表した。特に後者の絵は一八九六年の王立水彩画協会展示会で絶賛され、海外植民地の儀典室用の絵として購入された。

ヘンリーは、その後、特に人物肖像画に力を入れ、若き女性を中心に多くの人物を描いた。晩年には有名な『キャンベル・ブラック博士』(Dr. Campbell Black)肖像画、『アーサー氏の子供達』(Children of Mr. T. G. Arthur)の他、彼が愛好した『金魚』(Goldfish)や若い女性のピアノを弾く姿を描いた『交響楽』(Symphony)を残した。

しかしながら彼自身の絵には、例えばグラスゴウ商工会議所三階の大広間に飾られる大絵画『桜の木の下の女性達』にも全女性が同じ顔で描かれるなど日本文化の影響が残続したと言われる。ヘンリーは、日本画と決別した後は主としてパリとロンドンを中心にスコットランドの風景画と人物画に専心して名声を高めた。彼の作品はグラスゴウ市や同大学美術館の他、アバディーン、エディンバラ、ダンディ、カーカルディ、ペイズリー、スターリング等の地方美術館の多くに収蔵されている⁽⁵⁹⁾。ヘンリーは数多くの勲章と栄誉を受け、一九四三年一二月にロンドンで逝去したが墓はグラスゴウにある⁽⁶⁰⁾。

4 ウィッスラー (J. A. M. Whistler)

ウィッスラーは一八三四年七月、アメリカのマサチューセッツ州のロウエル (Lowell) にスコットランド人鉄道技師の息子として生まれた。彼の父は一八四二年にロシアのツァー大帝の招きでロシアに渡りモスクワ・セント・ピータスバラ間の鉄道を完成させた。⁽⁶¹⁾ 彼の母方は一七四五年のジャコバイト乱に破れスカイ島からアメリカの北カロライナへ囚送移民されたマクネイル (MacNeill) 一族であり、ウィッスラー自身も、それを誇りとした。一八四九年に彼の父がモスクワで逝去すると家族はアメリカへ戻ったが、彼はモスクワ滞在中に科学アカデミーで絵画を習っていたことから、帰国後は陸軍士官学校を終えると、一八五一年にパリで画家として自立、その後ヨーロッパ各地を旅しながら画家として活躍し一八八八年に著名なスコットランド人彫刻家フィリップ (J. B. Philip) の娘ビアトレスと結婚した。⁽⁶²⁾

ウィッスラーの二大コレクションは、ワシントン美術館のフレア画廊 (Freer Gallery) とグラスゴウ大学ハンテリアン美術画廊 (Hunterian Art Gallery) とされるが、特に後者は一九三四年に夫人の遺産相続人ビルニ・フィリップ (Birnie Philip) 嬢の遺言に基づき寄贈である。一九三五年にウィッスラーのチェルシー (Chelsea) の隣宅に住んでいたグラスゴウ・ボーイズのウォルトンの息子でグラスゴウ大学生物学教授ジョン・ウォルトン (J. Walton) の尽力で

寄付され、続いてマカラン (J. A. McCallum) の尽力でエッチングやリトグラフが付加された。そして一九五五年には彼の従兄弟ジョセフ (Joseph Whistler Revillon) からの寄贈を加え一大コレクションとなった。さらに一九五八年に大学自ら、ウィッスラー制作の『蝶々様式の家具』(Butterfly Cabinet) や『黄色と金色の調和』(Harmony in Yellow and Gold) を入手して、ハンテリアン美術館はウィッスラーの油絵、一〇〇点のバステル画、一六冊のスケッチブック、三五〇点のエッチング、一五〇点のリトグラフをもつ世界的なコレクションとなった。

ウィッスラーは、グラスゴウ・ボーイズの仲間との交流の中で日本画に憧れ、一八七四年に彼自身のパトロンで著名なリパブルの海運船舶業者レイランド (F. R. Leyland) 夫妻のために、『桃の花』屏風 (一八六七年八月のオザワ・ナンポの署名) の裏に日本風な『青と銀・古いバクー海の橋』を描いたが、それは、グラスゴウ大学図書館横の特別室に掲げられている。⁽⁶³⁾

ウィッスラーの絵の評価が高まったのは、一九〇三年四月にグラスゴウ大学が名誉学位を決めたことが大きい。彼の推薦者は王立スコットランド・アカデミー会長でグラスゴウ・ボーイズのガスリー卿と同じくグラスゴウ・ボーイズのメンバーで同大学英文学教授のラレイ (W. Raleigh) であった。しかしウィッスラーは秋の授与式典を待つことなく、その年の七月に逝去した。ウィッスラーは死

の直前に、彼の絵画が世界的に評価されない時代にグラスゴウ大学が「彼の絵画の時代を先駆する手法と思考」を評価して名誉学位を決定したことに最大に感謝して、友人・知人親戚に同大学への彼自身の絵の遺贈を依頼していた。⁽⁶⁴⁾それがグラスゴウ大学に世界最大のウィットスラー絵画コレクションがある所以である。

VIII 結 び

ヨーロッパで幕末・明治のジャポニズムが評価された背景には、その「媒介」役としての一九世紀後半に世界に張りめぐらされたスコットランド人ネットワークが存在・機能していたからである。つまりイギリスの産業革命は、ある意味では「エンジン」の思想と哲学」を実践したスコットランド人技師の手により遂行され、その成果はイギリスの枠を越えてヨーロッパ大陸から、南北アメリカ、アジア・アフリカまで運ばれて行く。陸上では蒸気機関車、海上では蒸気船によってイギリスを中心に世界各国は連結された。人の面では近代技術の伝播者のスコットランド人技師が同郷出身の外交官・科学者・ジャーナリスト・商業者と結びあつて情報を伝え、スコットランドからの出移民運動を生んだ。⁽⁶⁵⁾彼らは新天地に同化してゆくと同時に異国の文化・技術を本国に紹介し、それがグラスゴウ・ロンドンを経由してヨーロッパ各地に伝えられたのである。特に幕末時代の琉球藩の精糖機械輸入に始まるグラスゴウから輸入された近

代工業の諸機械は、日本の工業化・近代化に著しい貢献をなす。ここには例えばグラバー、ダイアー、ブラウン等のスコットランド人達を介して日本への人的交流が生まれ、ヨーロッパ各地に日本の物産を運んだ。またスコットランド商人のネットワークを介しての幕末期の薩摩・長州藩士の密航に始まる邦人青年のスコットランドへの留学、さらに工部大学卒業生のグラスゴウ大学への留学から日本の海軍・海軍ビジネス関係者の留学ブームがおこり、彼らを通じて日本の芸術・美術品が運ばれたのも当然の理である。その動きを象徴したのが一八八八年と一九〇一年のグラスゴウで開催された国際産業博覧会であった。

これらが明治時代のヨーロッパのジャポニズムの背景に存在し、そしてスコットランドにもマッキントッシュ、ホーネル、ヘンリー、ウィットスラー等が登場し活躍したのである。

注

- (1) 日野永一「万国博覧会と日本の『美術工芸』」(吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣 一九八六年) 二二頁。金井圓編訳『描かれた幕末明治、イラストレイテッド・ロンドン・ニュース日本通信 一八五三—一九〇二』(雄松堂書店 一九七三年) 一八八頁。

- (2) 拙論「近代技術の伝播者①⑦」(『自然』中央公論社 一九八三年九月—一九八四年三月) 参照。

(c) M. Moss & J. R. Hume, *Workshop of the British Empire, Engineering and Shipbuilding in the West of Scotland*, Heinemann, London & Edinburgh, 1977. p. 3.

(4) 拙著『近代スコットランド移民史研究』(御茶の水書房 一九九八年) 参照。

(5) 拙論「工部大学校都検(ヘンリー・ダイアー)」(梅溪昇編『ザ・ヤトイ』思文閣 一九八七年) 三二〇―三二二頁。

(6) 拙著『国際日本を拓いた人々―日本とスコットランドの絆―』(同文館 一九八四年) 三九―四三、六八、八〇―八一、一二三―一二七、二二七―二四七頁参照。

(7) 出口保夫「ヴィクトリア期後期の社会と文化」(出口保夫編『世紀末のイギリス』研究社出版 一九九六年) 一五、一六頁。

(8) 拙著『近代スコットランド社会経済史研究』(同文館 一九八五年) 三七―五四頁参照。

(9) スコットランド人知識家には伝統的にグラランド・ツァアの伝統があり、アダム・スミスもフランスで啓蒙主義者と交流したことは有名である。水田洋『アダム・スミス研究』(未来社 一九六八年) 一二四―一四〇頁。またスコットランド思想が旧大陸(ヨーロッパ)や新大陸(アメリカ)との交流があり極めて普遍的であったことは、

田中秀夫『文明社会と公共精神―スコットランド啓蒙の地層―』(昭和堂 一九九六年) 参照。

(10) 著名なスコットランド人建設技師マカダム(J. McAdam) がガリバルディの親密な友人で、彼の応援下にグラスゴウ市民はイタリア独立支援運動を展開した。 *Clyde Men of the World, An Exhibi-*

tion of Archives at Kelvingrove Museum and Art Gallery, November 1979. p. 21.

(11) W. H. Marwick, *Economic Developments in Victorian Scotland*, Augustusm. Kelly, Clifton, rep. in 1973. pp. 99-101. 224-228.

(12) ション・フライ著(小泉和子訳)『イギリスの家具』(西村書店 一九九三年) 二〇五―二〇七頁。

(13) 例えば一八八一年にグラスゴウ市で『東洋美術展―日本―』が開催され、五〇〇点近くの陶磁器が六五名の協力者から出展されたが、多くはセント・アンドリュース、ダンディの造船・海運業者が多かった。 *Oriental Art Loan Exhibition, Comprising Principally the Decorative Art of Japan and Persia*, Corporation galleries, Glasgow, December 1881-May 1882.

(14) 拙論「工部大学校とお雇いスコットランド人教師」(拙著『国際日本』前掲) 九六―一〇〇頁。

(15) G. Fox, *Britain & Japan, 1858-1883*, Macmillan, London, 1969. p. 371. 海上保安庁燈台部『日本燈台史』(社団法人燈光会 一九六九年) 一六頁。

(16) 拙論「グラスゴウ大学と日本人留学生」(拙著『国際日本』前掲) 一八二頁。 *Minutes of Court of University of Glasgow*, 10th October, 1875.

(17) 田中彰『岩倉使節団と「米欧回覧実記」』(岩波文庫 一九七八年) 第二卷一九九頁。 *Post Office Directories at Glasgow, 1873 & 1893*, グラスゴウ大学・ハイリイ図書館蔵。

(18) ダイアーの意向にもかかわらず、当時の日本では高等教育教科

- に美術を入れる発想はなく断念した。当時の様子は、『三好信浩』近代日本産業啓蒙書の研究』(風間書房 一九九二年)六〇二―六〇八頁。
- (19) 拙稿「工部大学校とグラスゴウ大学―日蘇関係史の一視点―」『社会経済史学』第四六巻第五号 一九八一年)七一―四頁。
- (20) H. Fenwick, *Scotland's Historical Buildings*, Robert Hale, London, 1974, p. 238.
- (21) D. Martin, *The Glasgow School of Paintings*, George Bell & Sons, London, 1897, pp. XII~XIII.
- (22) 拙著『蘇格蘭土(スコットランド)と日本・世界―ボウモア・ウイスキーと薊(アザミ)の文化―』(近代文芸社 一九九九年)三三頁。
- (23) 石田潤一郎他編『近代建築史』(昭和堂 一九九八年)五〇―五四頁。
- (24) 吉田光邦編著『万国博覧会の研究』(思文閣出版 一九八六年)一―一四頁。
- (25) グラスゴウ・ボーイズと呼ばれる画家は代表的な二〇名を入れ、三〇名近くいるが、ここでは日本との関係の強い四名を取り上げ、D. Martin, *op cit.*, pp. XI~XXIII.
- (26) 吉田光邦『改定版万国博覧会―技術文明的に―』(日本放送出版協会 一九八五年)四五―五三頁。
- (27) C. A. Oakney, *The Second City*, Blackie, Glasgow & London, 1976, p. 113.
- (28) フォース橋は、グラスゴウ大学への邦人留学生渡辺嘉一の「片もち橋」案を採用して完成された。拙著『国際日本』(前掲)一七八、一九一、二〇二、二六〇頁。
- (29) P. Kinchin & J. Kinchin, *Glasgow's Great Exhibitions, 1888-1901-1938-1988*, White Cockade, 1988, pp. 20-21.
- (30) J. R. Hume & M. S. Moss, *Bearmore, The History of A Scottish Industrial Giant*, Heinemann, London, 1979, pp. 38, 54, 261.
- (31) P. Kinchin & J. Kinchin, *op cit.*, p. 34. 拙稿「東洋のイギリスの誕生」『自然』四五八号 中央公論社 一九八四年三月)九〇―九二頁。
- (32) スコットランド系海運業者については、拙著『近代スコットランド鉄道・海運業史―大英帝国の機械の都グラスゴウ―』(御茶の水書房 一九九九年)一三五、一三三―三五頁。
- (33) E. Dunlop & A. Kamm, *The History of Glasgow*, Richard Drew Publishing, Glasgow, 1984, p. 25. D. Murray, *Lord Kelvin, as Professor in Old College Glasgow*, Meckelhouse, Jackson & Co, Glasgow, 1924, pp. 45-48.
- (34) 拙稿「スコットランド機械工業史―H・ダイアリーのグラスゴウ機械工業調査報告(一九〇一年)を中心として―」『創価経済論集』第一一巻第二号 一九八一年)四五―八二頁。
- (35) スコットランド人技術移民が最も成功したのもアメリカである。拙著『近代スコットランド移民史研究』(御茶の水書房 一九九八年)一四七―一五三頁。両国の関係の深さは、A. Hook, *Scotland and America, A Study of Cultural Relations, 1750-1835*, Blackie, Glasgow and London, 1973, pp. 2-4.

- (36) 拙著『近代スロットランド社会経済史』(前掲)一八四—一九〇頁。J. Hood ed., *The History of Clydebank*, Parthenon Publishing, Carnforth, 1988. pp. 3-14.
- (37) Bremner, *The Industries of Scotland, Their Rise, Progress and Present Condition*, A. M. Kelly, New York, 1969. pp. 34-37, 140-146.
- (38) ケルヴィン卿が日本の伊藤や教え子の志田等と交わした数多くの書簡がそれを物語る。ケンブリッジ大学所蔵の『ケルヴィン卿書簡集』(*Collections of Correspondence of Lord Kelvin*, Cambridge, 1924) 参照。
- (39) 拙論「日本人留学生—グラスゴウ大学と日本語入試」(拙著『国際日本』前掲)二〇六、二一三頁。グラスゴウ大学教授会記録 (*Minutes of the University Court of Glasgow*, 7th February, 1901 & 6th November 1901) の二回の記録が残る。
- (40) 拙論「一九世紀の日本・グラスゴウ交流史—グラスゴウ領事 A・R・ブラウンと日本」(『創価経済論集』第二巻第三号 一九八二年) 参照。
- (41) 例えばグラスゴウの光学器械会社バア&ストラウド社に、一八九八—一九三〇年間に、二三九名の邦人が訪問した。拙稿「日蘇交流史の一考察—バア&ストラウド社の『訪問者録』(一八九八—一九三〇年)に表れる日本人達」(『大阪大学経済学』第三五巻第一号 一九八五年)二九七—三二七頁。
- (42) 平野勇夫訳『大日本・東洋のイギリス—国民進化の研究』(H. Dyer, *Dai Nippon, The Britain of the East, a Study in National Evolution, 実業の日本社* 一九九九年)が参考となる。
- (43) 拙稿「スロットランド出移民」(拙著『近代スロットランド移民』前掲)一四七—一五五頁。またカーネギーについては、正木久司訳『アメリカ企業二〇〇年』(T・C・コクラン著 文真堂 一九八九年)九六、三四六頁。
- (44) 拙稿「日本人留学生の変容」(『自然』一九八四年二月号)九七頁。
- (45) A. G. Clement & R. H. S. Robertson, *Scotland's Scientific Heritage*, Oliver & Boyd, Edinburgh and London, 1961. pp. 55, 63, 83. *Clyde Men of the World* (*op. cit.*) p. 26. B. Fletcher, *Great Scottish Discoveries and Inventions*, Richard Drew Publishing Ltd, Glasgow, 1985. pp. 12-13.
- (46) British Library Cataloguing, *Charles Rennie Mackintosh*, 1868-1928, Glasgow School of Arts, 1987. pp. 14-33. G. Hay, *Architecture of Scotland*, Oriol Press Ltd, 1977. p. 87.
- (47) ドレッサーはメルボルン博覧会後の一八七七年に来日した。横山俊夫編「視覚の一九世紀—人間・技術・文明—」(思文閣 一九九二年)一八九頁。ドレッサーと日本については、鈴木博之「クリストファー・ドレッサーと日本」(吉田編『万国博覧会の研究』前掲)四五—八六頁。
- (48) P. & J. Kinchin, *op. cit.*, pp. 26, 34, 38.
- (49) National Trust for Scotland, *The Hill House*, McCornquodale Ltd, 1985. pp. 13-18. Hunterian Art Gallery, *Mackintosh Flower Drawings*, University of Glasgow, 1988. p. 7.

- (50) 横川善正『ティールームの誕生、美覚のデザイナーたち』(平凡社選書 一九九八年) 一三二—一四四頁。
- (51) British Library Cataloguing, *op. cit.*, p. 10.
- (52) 松村起「世紀末の生活技術」(出口保夫編『世紀末のイギリス』前掲) 四二頁。
- (53) F. H. Newbery, *The Glasgow School of Painting*, George Bell & Sons, London, 1897, p. 32. H. B. Morton ed., *A Hill Head Album*, Glasgow W2, H. B. M. 1972, p. 35.
- (54) 一九七八年—一九七九年六月にかけて「ラスモウ・ホイマン・エブ・ホイマン・ロマンの巡回展」が「ホーネン・リーの日本旅行」のテーマで九〇点近くが展示された。W. Buchanan, *Mr. Henry and Mr. Hornel visit Japan*, The Scottish Art Council, 1978 が参考となる。
- (55) F. H. Newbery, *op. cit.*, pp. 30-33.
- (56) *Ibid.*, p. 25.
- (57) W. Buchanan, *op. cit.*, p. 17.
- (58) F. H. Newbery, *op. cit.*, p. 27.
- (59) Polygon & Scottish Museums Council, *Scottish Museums and Galleries Guide*, Glasgow Herald, 1986, pp. 4-8.
- (60) W. Buchanan, *op. cit.*, p. 14. ロマン・リーのスコットランドの鉄道・造船業の技術移転の関係を築く。D. F. McGuire, C. Mitchell, 1820-1895, Victorian Shipbuilder, New Castle upon Tyne County Council Libraries and Arts, 1988, p. 12.
- (61) Hugh Fraser Foundation, JAMES McNEILL. Whistler at the Hunterian Art Gallery, Glasgow District Council, 1990, p. 6.
- (62) K. Donnelly & N. R. Thorp, *Whistler and Further Family*, Glasgow University Library, 1980, p. 15.
- (63) ウィンズラーが葛飾北斎を英国・ラスモウに紹介したと言われ、彼の描いた蝶々夫人と北斎の結婚の絵が一八八九年—二月二九日にラスモウ芸術協会に披露された。W. B. Buchanan, *op. cit.*, p. 7.
- (64) E. R. Pennell & J. Pennell, *The Life of James McNeill Whistler*, Vol 2, London & Philadelphia, 1908, p. 46. M.F. MacDonald, *Whistler Pastels and Related Works in the Hunterian Art Gallery*, University of Glasgow, 1984, p. 34.
- (65) 拙論「近代スコットランド移民活動の思想・哲学」(拙著『近代スコットランド移民史研究』前掲) 三三—六〇頁。